おおさか KEYわーど 第36回

アートが氾濫していたオオサカ

―世界からアーチストが中之島に。

展示内の雰囲気もスッキリ、モダンで前衛的

写真：「オオサカがとんがっていた時代
―戦後大阪の前衛美術 焼け跡から万博前夜まで―」
展覧会会場

いまこんなタイトルの展覧会を開いている。「オオサカがとんがっていた時代―戦後大阪の前衛美術 焼け跡から万博前夜まで―」。会場は、私が館長の大阪大学総合学術博物館であり、自分のところの宣伝をするなと叱られそうだが、大阪を考える上でこのテーマは重要だ。

大阪が繁栄した黄金時代はいつだろう。太閤さんの昔にさかのぼらないでもよいが、大正末に第2次市域拡張し、人口面積とも東京市を抜いて日本第一、世界第6位のマンモス都市“大大阪”になった時代もピークの一つだろう。この時は地下鉄や御堂筋など都市基盤だけではなく、文化都市の建設を市民全員で進めようという気概があり、天守閣復興や市立美術館や電気科学館も建設されている。

しかし、戦争が勃発し、大阪も戦時体制に組み込まれて、空襲で焼き尽くされてしまう。昭和20(1945)年の夏の暑い晴れた日、焼け野原に立った大阪の美術家たちが、戦後、どのように美術を復興し、世界に発信しようとしたかが展覧会のテーマなのである。

現代の大阪は「お笑い」と「こなもの文化」の街のように言われているが、戦後は尖端的な“アヴァンギャルド(avant-garde)”―前衛芸術の拠点であった。昭和20年代、美術団体が結成され、斬新な表現を求めて試行錯誤を重ねていく。池田遊子(ゆうし)の「生活美術連盟」、瑛九(えいきゅう)の「デモクラート美術家協会」も大阪を本拠に設立され、京都の日本画の革新団体「パンリアル美術協会」も大阪市立美術館で展覧会を開催する。

なかでも大阪を拠点に、世界で評価が高まっているのが「具体美術協会」である。吉原治良を中心に結成され、元永定正、白髪一雄(しらが かずお)、村上三郎、嶋本昭三、田中敦子らが活躍した。足でカンヴァスに描く白髪の作品や、無数の電球を吊り下げた田中の電気服のように、彼らの作品は独創的で、まさしく“とんがった”精神が生み出す芸術であった。昭和37(1962)年には、中之島の朝日新聞社の近くに「具体ピナコテカ」が開館し(ピナコテカは絵画館の意味)、世界からジャスパー・ジョーンズやラウシェーンバーグなどの画家や、ジョン・ケージなどの前衛作曲家が来訪している。

東京の批評家たちから無視されていた「具体美術協会」が、フランスの批評家ミシェル・タピエによって知られ、海外から評価が高まったことも有名だ。最近でも、ポンピドゥー・センターやニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館などで回顧展が開かれている。

現代日本は、美術館も博物館も採算性のことを言い過ぎる。大阪にしても、もっと精神的に大事にすべきものもあるだろうし、世界に名を馳せた戦後大阪の芸術運動も知らずに、現代大阪の文化を論じるのはあまりにも不勉強である。…ということで企画した展覧会だが、タイトルをみて「つまり今の大阪は衰退しているという訳ですな」とつぶやいて帰った入館者がいた。実際そうかもしれない。いや、そのままで終わらないことを願って開催したんですが…うーん。

大阪大学総合学術博物館　第16回企画展「オオサカがとんがっていた時代―戦後大阪の前衛美術　焼け跡から万博前夜まで―」は　7月6日(土)まで。日曜休館、午前10時30分～午後5時。入場無料。阪急宝塚線石橋駅下車。
お問い合わせ Tel 06-6850-6284

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。